



編集・発行 邑楽町役場企画課  
 〒 370-0692 (住所記入不要)  
 ☎ 0276-88-5511 (代表)  
 ☎ 0276-47-5007 (企画課直通)  
 ☎ 0276-89-0136  
 http://www.town.ora.gunma.jp  
 ✉ koho@swan.town.ora.gunma.jp

邑楽町携帯サイト  
 2次元コード対応の携帯電話は、右のコードをご利用ください。読み取りができない場合はURLをご入力ください。  
 携帯用URL http://www.town.ora.gunma.jp/k



〈第六十八回〉

若い人たちに語り継ぎたい、  
 次の世代に残しておきたい。  
 貴重な話をお届けしますー。

## あすへひとこと

いつの時代までも残したい

### 邑楽町の昔ばなし



渋沼にある「火の見」から見渡すと、南に広がる渋沼集落が見えます。ちょうど藤川渋沼の端が、集落の中心になったようです

#### 表家（おもてんち）

渋沼の戸数は現在約50軒ばかり、町の行政区で一番小さな集落です。昔は、なお人家も少なかったようです。この集落のほぼ中央にある家は、その昔は集落の一番前(南)にあったそうです。したがって、土地の人たちは「おもてんち」と呼んでいます。

その家の先祖は墓石から推定すると、今から350年も前から渋沼に住んでいたといわれます。

初めは人家も少なかったので日当たりのよい一番前に屋敷どりをしたと思います。それが次第に戸数が増え、今ではほぼ中央になっています。

#### 綿泥棒

狸塚辺りでは明治の初めころまで、どの農家でも、毎年盛んに綿を栽培していました。春に種子をまくと、秋には白いきれいな綿帽子の花を咲かせます。

江戸時代の末のころの話ですが、西北に赤城山がくっきりと見えた秋の終わりのころのこと、農家では綿の収穫で大忙しでした。

村の東はずれに、村でも大きな農家がありました。この家では農繁期で人手が足らず、お寺の近くにある畑までは手が

回りませんでした。

その日の夕方のこと、たまたま、お坊さんが通りかかり、大きな声で「こんなにも良い出来の綿は早く取り入れないと、今晚あたり盗んじやうよ」と冗談を言いながら、山門に帰って行きました。ちょうど、その晩は月夜で、あたりは屋のように明るく照らされていました。

ところが翌朝、主人が寺の近くの綿畑に行くと驚きました。昨日の夕方まで、あんなにたくさんあった綿がすっかり摘み取られているではありませんか。このことはすぐ村中に知れ渡り、誰言うとなく「坊さんが昨日、今晚あたり盗んじやうよ」と言っていたから坊さんの仕業に違いない」ということになり、早速役所に届け出ました。

取り調べの役人は、前後の様子や村人の証言から「犯人は坊さん」に間違いないと断定し、重い刑罰を言い渡しました。しかし、主人は「真犯人は坊さんではない」坊さんが声をかけたとき、近くで聞いていた村人の誰かが共謀して、一夜で綿摘みをし、その罪を坊さんに被せたとに違いないと思ったそうです。やがて住職のいない寺は廃寺になり、狸塚本郷の檀家は別の寺の檀家になったと伝えられています。



【発行】 邑楽町老人クラブ連合会 【編集】 あすへひとこと編集委員会  
 平成 10 年 12 月 31 日発行「高齢者の語り(第六集)あすへひとこと」より



緑を待ってる  
 (里前公園)



Photo 松村光明(記録ボランティア)

#### ひとりごと From editors

▶4月の異動で広報の担当係長になった小室敬祐と申します。入社以来、ずっと土木畑を歩いてきたので、不慣れな部署のため毎日が新しく、そして忙しく過ぎていきます。もう5月になりましたが落ち着きません。▶先日、早速お手伝いとして取材に同行する機会がありました。現場に着いて相手さまにあいさつをすると、ムダのない動きでテキパキと準備を始め、撮影を開始する担当の○澤○樹くん。カッコ良かったです。そして、とても頼もしく見えました。もうひとりの担当の○澤○樹くんとはまだ取材に出かける機会がないので、その時を楽しみに待っています。▶読む側から、作る側に立場が変わりました。当たり前のことですが、責任感と緊張感をもって仕事をしていきたいと思えます。(小室)



この広報紙は、自然保護のため  
 植物油インキを使用しています。